

知求会ニュース

2020年5月

第74号

◎ 博士課程 入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士課程国際学専攻に入学した石文君さん(国際交流研究専攻・第14期生)、張喬さん(国際社会研究専攻・第20期生)、劉晶洋さん(国際文化研究専攻・第17期生)進学おめでとうございます。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録53を参照)

◎ 修士課程、入学おめでとうございます！

今回の入学者は、地域創生科学研究科社会デザイン科学専攻グローバル・エリアスタディーズプログラムの第2期生8名でした。同専攻多文化共生学プログラムの第2期生26名でした。計34名でした。なお、昨年10月に多文化共生学プログラムに2名の入学者がありました。

研究室訪問 52 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「19世紀フランスを通して、現代の問題を見つめること」

槇野 佳奈子

皆さま、こんにちは。私は2019年4月に国際学部に着任いたしました。2019年度はフランス語関係の科目と、フランス文化論の授業を担当させて頂きましたが、授業ではあまり自分の専門について話す機会がございませんでした。本稿ではできるだけわかりやすく、私の取り組んでいる研究の内容についてお伝えできればと思っております。

私の研究分野は、19世紀のフランス文学と思想史です。私はフランスの大学で5年間研究しておりましたが、現地の大学で2016年に取得した博士学位は「仏文学」になります。とはいえ私が研究している内容は、皆さんが想像するような伝統的な「仏文学」の枠からは少し外れるかもしれません。多くの方は19世紀フランス文学というと、フローベール(1821-1880)の『ボヴァリー夫人』や、近年映画化されたことでも有名なユゴー(1802-1885)の『レ・ミゼラブル』のような小説を真っ先に思い浮かべることでしょう。高校で世界史を選択した人にとって、フローベールやユゴーの名前は少し授業内で紹介されていたりするので、そういった作家たちの名前がここで挙がるのも当然のことかもしれません。しかし私の研究は、こうした文学作品を分析対象としているわけではありません。もちろんこういった文学の動向にも関心を抱き、それなりに目を配っているつもりですが、私の研究では19世紀フランスの新聞や雑誌に掲載されていた批評や、当時最先端の科学を一般読者にわかりやすく解説していた科学普及本の記述を、主な分析対象としています。

実は、今日の日本における私たちの生活にも通じるような「鉄道」や「写真」といった最先端の科学技術が広く人々の生活の中に浸透し始めていたのが、19世紀のフランス社会でした。博士論文においては、特に1839年のフランスにおいて世界で初めて公式発表された写真技術に着目しました。発明当初、写真という表現手段は芸術分野と深い関係の中から生み出されたのですが、この技術が科学アカデミーで公式発表されると、写真技術は「科学」に属する発明品として広く認知され始めることとなります。写真というこの新生の発明品が19世紀フランス社会において、「科学」と「芸術」との関係の中でいかに受け入れられていったのかを、同時代のフランスの科学普及活動家ルイ・フィギエ（1819-1894）という人物の著作や、彼以外の書き手が残した、当時の新聞や雑誌の批評を中心に分析したものが、博士論文の内容になります。

ここでいう「科学普及活動」という語は、*vulgarisation scientifique* というフランス語について、私が選んだ訳語です。このフランス語は時に「科学啓蒙」として日本語に訳されることもあります。いわゆる18世紀の哲学における啓蒙思想（*Lumières*）とは別物です。フランス語のつづりにおいてもご覧の通り両者に重複する要素はありませんので、混同や誤解を避けるため、あえて「科学普及活動」という語を選んだ上で研究を進めている次第です。

フランスにおける科学普及活動は、最新の科学知識を単行本や定期刊行物という形で、一般向けに一つの娯楽として提供するものでした。こうした活動は1850年代から一気に広まったのですが20年ほど経過すると、少しずつその当初の人気に陰りが見られ始めます。というのも、蒸気機関や写真といった当初は「最新」であった科学技術も、日常生活の中に普及していくにつれて、その新しさとしての魅力が次第に失われていくからです。今日では考えられないことですが、当初は「蒸気機関」とか「写真」とかいう単語を聞くだけで、人々はわくわくするような高揚感を覚えていたようです。特定の単語を聞くだけでなぜか興奮する……、そんなおかしな経験に心当たりのある人は少ないかもしれませんが、この時代のフランスは、科学の進歩に多くの人々が熱狂し、一種の異常な情熱に一時的に酔いしれていた状態だったのかもしれない。

現代に生きる私たちが、19世紀という過去の事象を、しかもこうした細かな視点で見ていくことに一体何の意味があるのかと思われる方もいるかもしれません。しかし研究を進めていく上で実感するのは、こうした過去の細かい事象に注目し、当時の具体的な事例にも一つ一つ踏み込んでいくほど、かえって現代の私たちの生活とのつながりが見出しやすくなるということです。例えば、「写真の登場によって版画は消滅するのではないか」という、写真の黎明期において頻りに表明されていた感情的な議論は、つい数年前まで声高に叫ばれていた、電子媒体の浸透によって紙媒体の本は消滅するのではないかという議論をどこか彷彿とさせるものですし、「写真の普及によって芸術家が失業するのではないか」という、同じく写真黎明期の異様な危機意識は、AIの普及によって〇〇の仕事が無くなるのではないかといった類の、今日の危機意識にも通じるものにも思えます。私が研究者と

して分析対象としているものはあくまで19世紀の事象ですが、結局私が本当に向き合おうとしているのは、現代の問題なのかもしれません。混沌とした現代の問題を見つめる際の一つのヒントとなりうるものは、埃をかぶって眠っている150年以上前の定期刊行物や、皆から忘れ去られて今では無名となっている作家たちの書物の中に、案外と見つかることもあるのかもしれません。

(2020年3月22日原稿受理)

博士録 53 2020年度博士課程の新入生を紹介します。

- ① 氏名：石 文君 (*SHI Wenjun*)
- ② 出身大学院：宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程国際交流研究専攻
- ③ 専門：国際学
- ④ 指導教官または所属研究室：戚研究室
- ⑤ 趣味：音楽をきくこと
- ⑥ 研究テーマ：A Discursive Analysis of College English Teaching in China from a Social Constructionism Perspective
- ⑦ 自己紹介：初めまして、中国から来ました石 文君と申します。現在、戚研究室で中国での大学英語教育に関する研究をやっています。これからの研究は社会構築主義の視点から政府の教育方針、教授法とカリキュラムという三つの側面から中国大学英語教育に関する問題点を究明していきたいです。どうぞよろしくお願い致します。

(国際学研究科 国際交流研究専攻 第14期生)

(2020年4月10日原稿受理)

- ① 氏名：張 喬 (*ZHANG Qiao*)
- ② 出身大学院：宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程国際社会研究専攻
- ③ 専門：国際学
- ④ 指導教官または所属研究室：高橋若菜研究室
- ⑤ 趣味：旅行、ボランティア活動
- ⑥ 研究テーマ：「SDGsと中国の循環型社会形成 —生活ごみ系3R促進のための公民連携(PPP)をさぐる」
- ⑦ 自己紹介：宇都宮大学(以下宇大)国際学研究科の張喬と申します。出身は中国遼寧省です。これからは宇大での四年目であり、研究生一年間と修士二年間を経て、今年の四月から博士一年生になります。幸いにもここで勉強を続けられます。私の趣味は旅行です。時間があれば、一人で、あるいは友だちと一緒に旅行に行きます。また余裕があれば、ボランティア活動にも熱心です。中国で大学の時、学校のボランティア活動に参加し、何回も障害者学校に行って支援しました。中国から離れて、おととしの夏、マレーシアに行って、海洋保護の活動に参加しました。ビーチを清掃

し、珊瑚を植えて、環境保護の重要性を心から感じました。これも今後の研究の方向性に基礎を作りました。

これからの研究テーマとして、身の回りの生活ごみを有効的に利用することを巡って、いかに公民連携の形で3Rを促進するかについて、研究する予定です。

これからの宇大での勉強・生活を楽しみにしております。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第20期生)

(2020年4月2日原稿受理)

- ① 氏名：劉 晶洋(LIU Jingyang)
- ② 出身大学院：宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程国際文化研究専攻
- ③ 専門：国際学
- ④ 指導教官または所属研究室：松金研究室
- ⑤ 趣味：読書、旅行
- ⑥ 研究テーマ：戦後都市祭礼における「伝統」の継承と変容に関する研究
ー山車類の中国表象の分析を中心にー
- ⑦ 自己紹介：この春、国際学研究科博士課程に進学しました劉晶洋と申します。
中国の山西省運城市出身で、2010年宇都宮市の中国姉妹都市である齊齊哈爾の大学に入学しました。両市友好交流の一環としての交換留学生プロジェクトに選ばれ、2013年宇都宮大学に参りました。大学卒業後、国際学研究科の研究生を経て、大学院生として松金ゼミの一員となりました。栃木市秋祭りに曳きだされる関羽山車人形を例として取り上げ、中国三国時代蜀漢の武将である関羽の日本受容について修士論文を執筆しました。これからも学際的な視点から日本の祭り文化を深掘りしていきたいと思っております。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第17期生)

(2020年4月7日原稿受理)

博士録 54

「忘却されてきたペルー人研究—家族、学校、地域と社会参入」

ブラボコハツ・ホセラウル(小波津ホセ)

博士論文要旨

忘却されてきたペルー人研究には、出稼ぎ現象が開始されてから約30年が経過する中で、多数派集団と比較して研究が実施されてこなかったこと、そして縦断的研究が実施されてこなかったことで忘却されてきた集団の存在を示唆している。かれらの日本での生活の可視化、そして子どもの社会参入に言及するため本稿では日本とペルーを対象地域にしてペルー人の子どもと親の合計71人にかれらの生活世界である家族、学校、地域の3領域に焦

点をあてている。子どもの社会参入では、学歴別に選出されたペルー人の子どもの進学・非進学の要因を親子関係にもふれながら分析することを目的としている。

本稿の特徴は 3 つある。まず、縦断的研究を実施したことである。成人したペルー人の子どもに 2 度聞き取り調査を実施して、初回は過去をふりかえり進学・就職等の各局面で受けた影響を探求して、数年後の追跡調査で現状を把握している。次に、学歴別に対象者を選出したことである。学歴別に選出することで進学・非進学の要因分析を行い、最終学歴後の社会参入の差異にも検討が容易となった。そして、親子双方に聞き取り調査を実施したことである。親子双方を対象とする研究は多くはなく、親子関係がもたらす進学・非進学、地域との関係性、そして社会参入への影響にも言及している。対象者や時期等の制限があったにもかかわらず一定程度の成果を収めている。

本稿の主張は 5 点ある。まず、日本でのコミュニティ形成・特徴および子どもに対する影響は移住過程から着目する必要があるが安易に移住集団という括りでは把握できないことである。次に、日本での進学・非進学の規定要因には従来の親の学歴や家族の経済的状況も重要であるが、これら以外にも地域を含めた親子関係と仲間意識が強いピアグループも関連している。それから、ペルー人の日本での社会参入にも学歴が重要である一方、高校卒業未満の対象者には「言語能力」と「(ペルー人としての)アイデンティティ」の獲得が高学歴対象者と類似する社会参入に迫り着く可能性を秘めている。そして、社会参入後の「継続性」は重要であり、親と異なった社会的地位の獲得には日本語能力も重要である。最後に、ペルーへ帰国した若者は年齢および人的資本、社会関係資本と機会構造によってペルーでの生活適応に差異が生じ、ペルーでの継続的な生活にはペルーまたは日系社会への帰属意識が重要であった。

7 章に分類される本稿は、序章で先行研究等を整理して変遷する日本社会の概観、ペルー人の位置づけと分析枠組みを提示している。また、本稿の重要概念である社会関係資本にも言及している。第 1 章では、ペルー人の来日で重要な役割を果たした栃木県真岡市に焦点をあて、社会関係資本の構築過程およびコミュニティ形成までの経緯・経験を聞き取り調査からまとめている。第 2 章では、学歴別に選出した 16 人のペルー人に焦点をあて、最終学歴と職歴の関係性を分析している。学校と地域を主要因として分析していること、そして 5 年後の追跡調査の実施が特徴でもある。第 3 章では、一定期間日本で生活してからペルーへと帰国した 12 人の成人したペルー人に焦点をあて、帰国までの経緯やペルーおよび日系社会への参入経緯をまとめている。かれらの社会参入には人的資本、社会関係資本と機会構造が重要な位置づけであり、3 年後の追跡調査ではペルーまたは日系社会への帰属意識がかれらの人生に変化をもたらした。第 4 章では、ペルー人 13 家族に焦点をあて親子に聞き取り調査を実施した。家族社会関係資本と地域社会関係資本に焦点をあて、言語の習得度合いと同胞との関係性で親子間に問題が生じるだけでなく、社会参入での特徴や人的資本にも異なった影響をもたらす見解を示している。第 5 章では、学歴別に選出した 30 人のペルー人の子どもに焦点をあて、社会参入までの経緯について第 4 章を参照にしながら

ら言及している。子どもの進学・非進学と社会参入には自助努力や制度的な支援以外にも学校や地域での仲間関係、家族内の親子関係や親の社会関係資本が重要な位置づけとなっている。最終章では、本稿の主張、成功者に対する考え方および忘却されたペル一人研究の意味にふれている。成功者とは、必ずしも高等教育修了後に社会参入した人に限定されず、苦勞して地位上昇した人も必ず存在し、多様な生き方が求められる現代で焦点があてられるべきであると言及している。

助言

誰が発した言葉か忘却したのですが、恩師から「研究には時間と費用をかけるべきだ」という言葉を聞き、研究期間中は何度も頭をよぎることがありました。私は、この名言(?)に「辛抱強さを忘れない」も追加されるべきだと感じました。研究分野が異なれば要求される技術や能力等が異なり、一般化はできないと思いますが必ず研究には時間、費用と辛抱強さは付きまとうと感じています。文献の整理や調査に費やす時間、調査やその他で発生する費用、そしてこれらを研究に反映させ、納得するまで遂行できる辛抱強さが重要になってきます。多くの人は「当然である」と感じているかもしれませんが、私は特に後期課程でこの3点を強く感じ、助言として共有することにしました。

また、研究を進める中で「迷い」は発生します。それは、個人的な経験から多様な先行研究や調査対象者にふれる、視野が広義・狭義になることで発生してきました。一般的に反映できる事象だと感じますが、初心・原点回帰で方向修正できると感じています。研究を誰のため、何のために実施している研究かを整理して遂行することが重要だと感じています。

後輩の皆様の実り多き研究を心から期待しております。

(国際学研究科国際学研究専攻 第8期修了生)

(2020年3月11日原稿受理)

知究人 35 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 31 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 31 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「チェコ留学体験記」

門上 友紀

私は2018年9月～2019年5月まで、チェコ共和国はオロモウツのパラツキー大学に交換留学をしていました。高校生のときから漠然と「留学をしたい」と考えていた私ですが、それが現実的となったのは、3年次に宇都宮大学に編入学してからでした。金銭的に私費で留学に行くことが厳しいと思われていたため、交換留学のことを知った時にはこれだ！（これしかない！）と思いました。そして説明会に行き、最も興味を惹かれたのがチェコでした。

理由の一つ目としては国同士が陸続き、またEUという同盟の下様々な面において共通事項があるヨーロッパで人々がどのように生活しているのかを実際に目で見たかったこと、自分もその中に身を置きたかったことがありました。短期大学の卒業論文で外国人技能実習生について執筆したことがあり人の移動に興味があったためです。二つ目に、英語力を向上させたかったことです。チェコの公用語はチェコ語ですが、多くの国から留学生が集まるパラツキー大学では留学生向けに英語で開講されている授業が多くあると知り、その点にも魅力を感じました。

さて、私には留学中に特に努力したことが二つあります。

一つ目に、英語力向上のため自ら積極的に行動することです。先に話したように、私は英語力の向上を目的の一つとしていましたが、寮に到着し、ドキドキしながら決められた部屋に行くと私を含めた4人中4人が日本人だったのです。「英語ペラペラになって帰るぞ～」と意気込んでいた私は少し拍子抜けしてしまいました。しかしそこで諦めるのではなく、私はイベントやボランティアに積極的に参加し、交友関係を広げることで部屋の外で英語を話す環境を自ら作り出しました。聞いていた通りアジア、北米、そしてヨーロッパ中からと多くの留学生がおり、様々な国の友人ができました。例えば特に仲良くなったのがウクライナ人の女の子で、それまでほとんど何も知らなかったウクライナという国を急に身近に感じたものです。

加えて、苦手（本当に苦手）であったプレゼンテーションの授業を受講したことで、人前で英語を話す力も得ました。ちなみにルームメイトは本当に仲が良く、一緒にお弁当を作ってピクニックをしたり、誕生日パーティをしたりと思い出が沢山です。チェコで出会えた素敵な縁に感謝しています。（4人中3人の名前が YUKI で、よく他の留学生を混乱させていました。）

二つ目に、就職活動との両立です。3月1日の情報解禁から帰国するまで、私はチェコにいながら就職活動をしていました。（オンラインでESを送る、テストを受けるなど）日本にいる友人は今頃企業説明会やインターンに参加しているかもしれない、もう内定を貰っているかもしれない、というような不安が全くなかったわけではないですが、留学を思う存分楽しみたいという自分自身の意思で、5月末に帰国することを選びました。他の就活生の様子を見なかったことが、焦らずマイペースに就活を進めることにつながりました。

帰国してからはスケジュール面において少し大変でしたが、留学経験について自信を持って話すことができ、それが企業の方にも伝わったのではと思います。

日本で生活しているとチェコについて耳にする機会はそうないと思いますが、ビールが美味しくて（チェコの人には本当にビールをたくさん飲む、晴れた日に外で飲むビールは格別だった）街が綺麗で、チェコ語が難しい（オロモウツでは英語が通じない場面も多々あり苦労したがそれも思い出）チェコという国が私は大好きです！多くの人に訪れてほしい場所ですし、私ももう一度行きたいです。

最後に、留学をサポートしてくださった宇都宮大学留学生国際交流課の皆様、私のやりたいことを尊重してくれた家族、応援してくれた友人たちには心より感謝いたします。ありがとうございました。

（国際学部 国際社会学科 第22期卒業生）

（2020年4月2日原稿受理）

「中国留学体験記」

荒谷 寿恵

私は去年の9月から今年の1月までの約5か月弱の期間、中国の寧波大学で交換留学をしていました。留学の動機は中国語の上達と、日本にいる時に自分の周りに集まった情報から持った中国像と、実際の中国がどのように違うのか自分の目で見てみたい、と思ったことでした。

中国で生活をし始めて一番強く感じたことは、「中国はでかい」ということです。これだけ聞くと、そんなの当たり前だ、何を言っているのかと感ずるかもしれませんが、しかし、国土面積は日本の約25倍あり56もの民族がいる中国は私にとって大きすぎて、留学が終わった今でも全く把握できるものではありません。住んでいたアパートの中庭にそびえる中華人民共和国の国旗を毎日窓から見下げるたびに、このひらひらと揺れる一枚の国旗に表されているものが大きすぎて、漠然とした恐怖と不安を感じたものでした。このように「知らない」、「分からない」ことが多い環境下で生活することはすごく怖いことであり、私はでかい中国のことをたくさん知ろうと試みました。何度も国内旅行に行ったり大学のある寧波市の歴史を勉強したり、現地の中国人の友人や先生方とご飯を食べながら中国のことについて話したりしました。そのうちに、不思議なことに国旗を見てもあまり恐怖を感じなくなってきたのです。私はたったの5か月弱しか中国で生活していなかったにも関わらず、あんなに怖かった中国に慣れてしまったのか？とも思いましたが、慣れるほど中国のことを知らないのを知ったような気になっているだけなのだ気づきました。知らないということはもちろん怖いことですが、知らないのに知ったような気になっていることもまた怖いことだと感じました。例えば私の地元である青森県や、大学生活5年目になる宇都宮のことも慣れてしまい何も感じなくなっていますが、私は何を知っていると言えるだろうか、外国人に自分の住む町について聞かれたとき、しっかりと説明できる

だろうかと疑問に思いました。留学を通して、中国に来たばかりの頃に抱いた、中国は大きくて知らないことが多い中で生活することは不安であるという感覚を忘れずにいたいと思うと同時に、見過ごしがちな自分の身近にあるものこそ知ろうと努力し続けることが大切であると強く感じました。

留学に行ったことで現地でしか得ることの出来ない体験や気づきがたくさんありました。このような経験ができたのは一重に指導教員の松金公正先生のご指導、大学関係者の方々・寧波で出会ったすべての方々・家族の温かいサポートのおかげです。本当にありがとうございました。日本には戻りましたが留学は私の中で通過点と捉えて、これからの人生において価値あるものにしてきたいと思います。

(国際学部 国際文化学科 第4年次在校生)

(2020年4月20日原稿受理)

学生サロン 20 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南14 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「思い切った人生を！」

磯部 亜希

滋賀県高島市をどれくらいの方がご存知でしょうか。私は今、その高島市で市議会議員をしております。

熊本地震直後のボランティア活動をきっかけに、市のことについて、思ったり、言ったりするだけではなく、自ら行動をしよう！と立候補したのが始まりでした。

仕事の内容は、住民の方が困っている事柄を聞き、市との橋渡しをして解決につなげることや、年4回の定例会で、一般質問や常任委員会等の議会に取り組むことなどです。

人に喜ばれた時はとても嬉しく、やりがいを感じます。その一方で、自分がいかに無知かということを知ることもあります。自分のことだけを考えるのではなく、市全体のことを考える視野が大切です。例えば、幼児教育・保育の無償化では、働くお母さんからは助かると言われる一方で、保育士の方からは、負担が増え、保育士確保の課題を訴えられます。両極の声を聞き、考えなくてはなりません。

そして、自分の暮らしと政治は密接に関係していることを多くの方々に感じてもらうことも議員の仕事なのだと思います。地域にもよりますが、ゴミの収集、水道の管理、市立病院の維持、小中学校の教育、介護を必要とする方や障がいをもった方への支援など、行

政によるものが数多くあります。自分一人で生きていく人は思いがちですが、この生活ができていくのは、様々な方々の支えのお陰です。不満を言うだけでは何も変わりません。行動することで変化が生まれます。無関心で、知ろうとすることすらしない、ということがどれほど怖いことなのか、という危機感を多くの方がもつことが必要だと感じます。

また、女性の目線で政治に関わることはとても重要だと思っています。地元の方からは、「子どももいるのに、よく議員になったね」とよく言われます。しかし、子育てをしてきたからこそ、地域との関わりの中で、地域の方々への感謝の気持ちが生まれ、議員になろうと思えたのです。子どもたちの未来へより良い形でつなげたいと心から思います。意思決定の場に多くの女性が加わることで社会はもっと変えられます。女性議員がさらに増えることを願っています。

大学時代は海外協力に関心をもっていました。しかし、大学の研究室で学んでいく内に、国内での問題にもっと向き合うべきだと思うようになりました。先生から、社会を支えてきた一方で、社会を形成する上で裏側に隠れてしまう方々に目を向けることの大切さを教わったのです。その学びは今の私の土台になっているように感じます。

今回、このように寄稿する機会をいただけたことに心から感謝いたします。

社会のために自分ができることを心懸けてくれる方が多く出てきてくれることを心から願っております。一度しかない人生を思いっきり楽しみましょう。

(国際学部 国際社会学科 第2期卒業生)

(2020年4月13日原稿受理)

フォーラム 2020年の皐月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)

「博士前期課程を終えて」

清水 友美

私は、3年前、社会人学生として国際学研究科を受験しました。当時、私は栃木県内の公立中学校に勤務しておりましたが、年少者に対する日本語教育に関心があり、日本語指導を必要とする子どもたちの支援に携わるための方法を模索しておりました。そのような中、宇都宮大学で開催された鎌田美千子先生のワークショップに参加し、先生から大学院への進学を勧めていただいたことをきっかけに、国際学研究科への進学を決意しました。

入学当初は、博士前期課程を修了するまでやり遂げることができるか不安でした。私は常勤でしたので、修了に必要な単位を取得するためには勤務時間内に休暇をとって履修したり、勤務時間後に講義の時間を設定していただいて受講したりすることが必要でした。また、修士論文の執筆には、先行研究をまとめたり、分析を行ったりするための時間の確保が必要となりました。私は、勤務校の先生方や生徒たち、大学院の先生方、家族など多くの方々に多大な迷惑をかけながら、修学させていただいておりました。だから、私にと

って修了するという事は、私自身のためだけではなく、そのような方々のご恩に報いるという意味も含んでいると感じておりました。

私は、大学での主専攻も日本語教育でしたが、卒業したのは10年以上も前のことだったので、講義で新たに得る知識も多く、学ぶ喜びを実感する日々が続きました。また、ゼミは、鎌田先生からご指導いただいたり、院生や学部生と意見交換をしたりする時間であり、非常に有意義でした。もちろん、研究を思うように進めることができず、悩むこともありました。しかし、今振り返るとそれも幸せな経験であったと感じます。

このような機会を私に与えてくださったすべての方々に、心よりお礼申し上げます。私の大学院での3年間は、私の夢の実現のためのステップとして始まりましたが、「学ぶ喜び」と「感謝」の大切さを深く感じる貴重な期間でもあったと思います。特に後者の二つは、私の人生の大きな財産となりました。私の夢は未だ叶っていません。その上、現在私たちを取り巻く環境は普段と大きく異なってしまっています。しかし、そのような状況においても私が前向きさと平常心を維持できているのは、「学ぶ喜び」と「感謝」を大切にするようになったからだと思います。今後、どんな環境においても私はこの二つを糧とし、前進し続けていきたいと考えております。

(国際交流研究専攻 第14期修了生)

(2020年4月20日原稿受理)

東南アジア支部だより

第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から年2回発行(4月1日、9月1日)の変更になりました。第9号の主な内容は以下の通りです。1. ご挨拶 2. お知らせ 3. 活動報告 4. 連載コーナー 狙えインスタ映え! ? 第5回アジア取材雑記 プラゴミ大氾濫に悩む東南アジア 谷澤壮一郎 / No.9 タイの昨今ータイの塾はフルサービスー大畑美優紀 / トコロ変わればザ☆談会 第二回 / 今旬のイチマイ 第五回 ともに感じる東南アジア 大宮勇樹 東南アジア地域在住の同窓生は積極的に声を掛け合っていただくことを祈念しています。

EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の34号の内容は、1 イタリア 復活祭で交通量増える。在宅呼び掛け 感染甚大な北部 2 EU支部だより ーバルコニーコンサートーです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●コロナ禍の中、皆様いかがお過ごしでしょうか。このニュースを編集している4月21日(火)に、自宅でインターネットのスピードテストをしました。Wi-Fiではダウンロードで21.4Mbps、アップロードで7.36Mbpsでした。2020年1月1日(水)のテストでは、ダウンロードで56.6Mbps、アップロードで7.27Mbpsでした。つまり、ダウンロードにおいて半分以下のスピードになっていてトラフィック障害が起きているようです。宇都宮大学でも、4月20日(月)からC-Learningによる遠隔授業で新学期が始まったことや、また自宅でのテレワークによってアクセスが増えているからと思われます。いずれにしても、通信回線において問題があります。5Gの時代が幕開けしたようですが、まだまだインフラが整備されていないように感じます。

●首都圏から全国に広まった「非常事態宣言」により、各方面に影響がでているのではないのでしょうか。上記の問題はインターネット環境についてでしたが、生活の面においてもさまざまなことで支障をきたしています。編集者の場合、まず3月中旬ごろから、図書館での新聞閲覧ができなくなったことです。4月13日(月)からはスポーツジムの休館により、水泳やサウナ・入浴ができなくなったことです。編集者が通っている放送大学栃木学習センターも4月8日(水)夕方から利用できなくなりました。また、4月の面接授業だけでなく、第1学期分が全面的に中止になり、7月実施予定の単位認定試験は学習センターでは行われず、自宅での受験となりました。

●人との交際にも影響がでています。毎月、有志でおこなっている勉強会も4月26日(日)は中止し、そのまま順延となりました。以前の職場での会合(食事会と飲み会)も2つ中止し、順延に追い込まれています。趣味の一つになっている美術鑑賞も、美術館の休館により、文化受容活動が大いに制約されています。そんな中で、オンライン飲み会「たくのみ」のアプリが活躍しています。

●以上の様に、いかに日常性が保たれなくなっていることが分かるかと思います。そこで、このコロナ禍をいかに乗り越えるかは、まず自己をどのようにコントロールできるかにかかっています。いかにストレスを解消し、適度な運動をし、どのように自制できるかでしょうか。編集者は放送大学での面接授業3科目(「情報デザイン!オリジナルの紋章」、「史料に読む下野の中世」、「奥日光の野生動物」)を楽しみにしていたのですが、大変残念でなりません。皆様はどのようにお過ごしでしょうか。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@freeml.com
